

祭礼に登場する子ども

——播磨地方の一つ物考——

一、はじめに

日本各地の祭礼で、小さな子どもが、きらびやかな衣装を身に着け、顔には化粧を施して登場し、ひととき目立っていることがある。

京都祇園祭の山鉦巡行の出發時には、先頭を進む長刀鉦に八〜十歳ぐらいの男児が乗り込み、山鉦の進路である四条通に渡された注連縄を切り落とす。この長刀鉦の稚児は、毎年ニュースでもとりあげられるため、よく知られているが、祇園祭には駒形稚児と呼ばれる馬に乗った稚児も登場する。駒形稚児は、御神体である木彫の馬頭を首から下げていることからその名称が付けられており、京都市南区久世上久世の綾戸國中神社の氏子から十歳前後の男児が選ばれる。七月十七日の神幸祭と七月二十四日の還幸祭で、三基の神輿のうちの一つである中御座を先導する役を務める。

祇園祭の例は一例にすぎないが、神事などで重要な役割を担う子どもは、各地の祭礼にも登場する。

越 智 みや子

そのなかに、「ひとつもの（一つ物）」と呼ばれるものがある（表1）。各地の事例に共通して見られる特徴としては、

①祭りで神意を伺うために神霊を移らせる「神のよりまし」と言われることが多い

②五、六歳の男児が務める

③地面に足を付けてはならないとされ、大人の肩車や馬などで移動する

④この役が登場しないと神事が始まらないと言われたり、神幸行列で神輿の前を進むなど重要な役割をする

⑤山鳥の尾羽や造花、^{すし}薄などを身に着け、紙垂^{しで}などをつけた笠を被り、化粧をする、または素顔が見えないようにしているなどがあげられる。

一つ物は、特に兵庫県加古川市、高砂市、姫路市の沿岸部に多く見られる。その分布状況を示したのが地図1である。

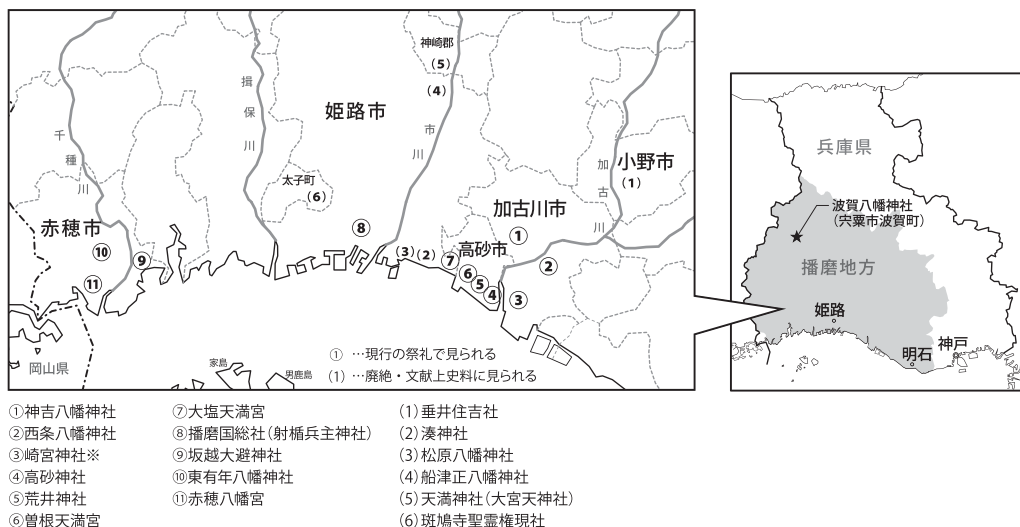
また、一つ物とは呼ばれないが、よく似た特徴をもつ子どもが登場する事例もある。地図1の①神吉八神社（加古川市神吉町）の頭人

表 1 現行の祭礼に登場する一つ物および、一つ物と同じ特徴を持つ稚児

神社名	呼称	祭礼名	祭日	神社所在地	備考
宇治神社、県神社	御方(みかたしろ)	大幣神事	6/8	京都府宇治市	成人男性
西条八幡神社	馬乗り (一つ物)	秋季例祭	10 月第 2 土曜日	兵庫県加古川市八幡町	
神吉八幡神社	頭人 (大正時代までは小頭人と呼ばれていた)	秋季例祭	10 月第 2 土曜日	兵庫県加古川市西神吉町	
崎宮神社	カゲシ	秋季例祭	10 月第 2 日曜日	兵庫県加古川市尾上町	
高砂神社	一つ物	秋季例大祭	10/10-11	兵庫県高砂市高砂町	
荒井神社	一つ物、稚児頭	秋季例大祭	体育の日の前々日、前日	兵庫県高砂市荒井町	
曾根天満宮	一つ物、ヨイヨイバー	秋季例大祭	10/13-14	兵庫県高砂市曾根町	
大塩天満宮	一つ物	秋季例大祭	10/14-15	兵庫県姫路市大塩町	
播磨国総社 (射楯兵主神社)	一つ物	一つ山 (60 年毎)、三つ山神事 (20 年毎)	一つ山 (60 年毎) / 不定期、三つ山神事 / 4 月	兵庫県姫路市総社本町	かつては 12、3 歳の少女が務めていたが、現在では成人女性が務める。
坂越大避神社	頭人	坂越船祭	10 月第 2 日曜日	兵庫県赤穂市坂越	かつては 6、7 歳の長男と決まっていたが現在では成人男性がこれを務める (昭和 40 年代以降)
東有年八幡神社	頭人	秋祭り	10 月 10 日前後の土日曜日	兵庫県赤穂市東有年	
赤穂八幡宮	頭人	秋祭り	10/15 直後の日曜日	兵庫県赤穂市尾崎	
春日若宮神社	馬長兄	おん祭り (渡御式)	12/17	奈良県奈良市	
熊野速玉大社	一つもの	御船祭	10/16	和歌山県新宮市	かつては「若き人」が務めたが現在では人形になっている
粉河産土神社	栗栖のひとつもの	粉河祭・渡御式 (2 年に 1 回)	7 月末の日曜日	和歌山県紀の川市	
琴弾八幡宮	一つ物	大祭・一つ物放生会	10/15	香川県観音寺市八幡町	
熊岡八幡神社	ヒトツモノ、オカヤモチ	秋祭り	10/18	香川県三豊市豊中町	

※福原敏男著『祭礼文化史の研究』「第一章 ひとつ物考」(1995 年)をもとに作成

地図1 播磨地方の一つ物の分布



※崎宮神社に関しては現在もおこなわれているかは不明であるが、2005年に出されたという報告があり現行とした。

と、②西条八幡神社(加古川市八幡町)の一つ物(馬乗り)である。同様に姫路市より西側の赤穂市には、⑨坂越大避神社(赤穂市坂越)の頭人、⑩東有年八幡神社(赤穂市東有年)の頭人、⑪赤穂八幡宮(赤穂市尾崎)の頭人の事例が一覧に加えた。

なお、地図1には、現在は廃絶しているが、文献史料上で一つ物が確認できる事例についても示している。それを踏まえると、播磨地方の南部には一つ物や、それによく似た特徴をもつ子どもが登場している、もしくはかつて登場していた事が確認できる。

ところが、最近の調査で、播磨地方の最北に位置する宍粟市にも一つ物の事例があることが判明した。

波賀八幡神社(宍粟市波賀町)の秋祭りに登場する一つ物である。この一つ物は、数年毎に不定期でおこなわれる御幸祭みゆきさいに出るため、これまで詳細な調査がおこなわれていない。そこで、本稿では平成二十八年(二〇一六)の現地調査をもとにこの事例を紹介するとともに、播磨地方南部の一つ物とあわせて播磨地方における一つ物の諸相について俯瞰する。

二、一つ物の研究史

本論に入る前に、一つ物に関するこれまでの研究成果について概観し、一つ物がどのようなものであるか紹介したい。

一つ物の研究は、これまで歴史学、民俗学の分野でおこなわれてきた。そのなかで、歴史の変遷や祭礼における位置づけなど、一つ物を総合的に分析し、一つ物が何であるのかを結論付けた最新のものとし

て、福原敏男の研究がある。⁽²⁾ 本章ではその成果を参考に一つ物の歴史や研究史について見ていく。

(一) 一つ物の歴史

「ひとつもの」または「一つ物」という語が最初に史料に登場するのは『平家物語』である。嘉保二年（一〇九六）三月、関白師通が山門大衆の呪詛にあつて病に倒れたために、師通の母が日吉社に病氣回復を祈るため、一つ物を奉納している。

その後、『平家物語』から五十年ほど時代が下り、祭りを見物した貴族の日記に一つ物が見られるようになる。この当時、貴族の祭礼見物が頻繁におこなわれているが、その例の一つが宇治鎮守明神離宮祭であった。藤原宗忠による『中右記』長承二年（一一三三）五月八日条によれば、宇治鎮守明神離宮祭の還幸祭の日に、一つ物が田楽・散楽と共に登場している。また、宇治鎮守明神離宮祭の記事の二年後、保延元年（一一三五）に興福寺が春日若宮社を創建し、翌年の保延二年（一一三六）には若宮祭礼を始めたが、史料上にこの祭りに一つ物が登場していたことが確認できる。他にも、賀茂社や稲荷社の事例があげられる。

十三、四世紀になると、一つ物は九州地方や、北陸地方の祭礼にも見られるようになる。その一方で、近畿地方では一つ物が見られなくなる。

近畿地方で再び一つ物の記事が現れるのは、十六世紀になってからである。しかし、時代の流れとともに、その姿も変化した。春日若宮祭の様子を描いた『春日大宮若宮祭礼図』（寛保二年「一七四二」）で

は、山鳥の尾の羽を立てた笠を被り、馬に乗った子どもを「馬長児」とし、後ろに続く従者を一つ物と説明している。

宇治鎮守明神離宮祭は、江戸時代になると、宇治神社祭礼と、郷内の悪疫を祓う大幣神事へ二分された。この大幣神事には「御方」^{みかたしろ}が登場する。大幣神事については、『兎道旧記浜千鳥』⁽³⁾（元禄十年「一六九七」序）に詳しい記載があるが、そこには、「御方俗云一物」というように「御方」の説明として一つ物の語句を用いている。

このように、「一つ物」という名称は、史料上では十一世紀までさかのぼることができるが、いつ、どのような経緯で一つ物が発生したかを明確にする史料は見つかっていない。

(二) 一つ物の研究史

一つ物に最初に取り組んだのは松本愛重で、平家物語に登場する一つ物の例をあげ、一つ物を造り物の一種とし、風流として考える視点を提示した。⁽⁴⁾ しかし、この視点は柳田国男を始めとする民俗学の分野では引き継がれなかった。柳田国男は、当初から一つ物の神聖性に注目しており、最終的に一つ物を神のよりましとし、一つ物を祭りの中心とする論を展開している。⁽⁵⁾

柳田に続き、中山太郎や堀一郎、戦後では、萩原龍夫、東條寛も一つ物について論じているが、基本的には「一つ物は神のよりましである」とする柳田説を基調にしている。

一方で、歴史学の方面では永島福太郎の研究がある。⁽⁶⁾ 永島は、宇治離宮と春日若宮社の祭礼に関する記録をもとに、一つ物の発祥は長承・保延年間（一一三〇年代）と推定し、その当時、神仏習合思想と御

子神（若宮）信仰の勃興があったことから、一つ物は、その新たな信仰が流行するなかで卓抜な造形として発生したとして、はじめて一つ物の発生過程について論じるとともに、これまでの一つ物の神のよりまし説とは異なる見解を提示した。

続いて一つ物の発生過程について論じたのは、橋本裕之である。¹⁰橋本は、永島が提示した一つ物の発生を長承・保延年間と限定することに異論を唱え、一つ物が平安期の都の祭礼ではないところに起源を持ち、それが祭礼芸能の一部として編成されたという可能性を残すべきであると論じた。結論的には永島説を踏襲しつつ、一つ物が風流の一環であるという視点から論じている。

以上のとおり一つ物の研究史を概観したところ、大きくは一つ物を神のよりましとする説と、芸能風流とする説に分かれることがわかる。この二つの説について検討をおこなったのが福原敏男である。¹¹

福原は、一つ物に関する文献史料を網羅した上で、一つ物は、平安末期の祭礼において、田楽や王の舞などの芸能とともに、祭礼の構成要素として定着するなかで認識され、記録されたものとした。

また、一つ物は、祭礼を彩る芸能風流と関わりが深く、固有の姿かたちや役割を持つ人物を指すのではなく、人によるパフォーマンスや造形表現など、その時代の流行や美意識を具現化したものを指すと述べている。したがって、「一つ物」という呼称を、神のよりましとなる子どもを表す言葉として学術用語的に用いて、すべてこれに当てはめてしまうのは誤りであるとし、これまで民俗学で、祭礼でよりましとなる子どもを一樣に扱ってきたことに対し、疑問を投げかけた。

現在は、福原の説以上の新たな見解は提示されていない。しかし、

現行の祭礼に見える播磨地方の一つ物を見る限り、一つ物の持つ神聖性、宗教性は無視できず、祭礼を彩る風流であると断言できない。また、播磨地方の一つ物と一口に言っても、その特徴は各事例で異なっており一括りにできず、一つ物が何者であるのかを明らかにするためには、個々の事例について、それを伝えてきた地域の歴史的背景や環境条件を丹念に紐解いていく作業が必要ではないだろうか。

続いて、播磨地方の一つ物の事例を個別に紹介し、その特徴を見ていく。¹²

三、現行の祭礼に見える一つ物

①神吉八幡神社（加古川市西神吉町）

神吉八幡神社の祭礼は、毎年十月の第二土曜日を宵宮、翌日曜日を昼宮としている。秋祭りに参加する氏子地区は、西神吉町と東神吉町で、この二町は宮前、天下原、神吉東、神吉西、中西村、西村、大国の八つの地区に分かれており、輪番で当番村を務め、祭礼全体を取り仕切っている。

頭人は六、八歳ぐらいの男児で、毎年、祭礼の当番地区が奉仕することになっている。頭人宅では敷地の入り口に赤い紙手^{しで}が一本立てられ、敷地の四方と玄関軒先に注連縄が下げられ、玄関扉脇には御神燈と、頭人名が記された木製の看板を立てる。大正時代には祭礼に先立って自宅門前に祭壇を築き、高砂の浜まで行って海水での禊ぎをおこなっていた。

なお、明治十八年（一八八五）までは、大人が務める「大頭人」が

存在しており、それに対応して子どもの頭人は「小頭人」と呼ばれていた。子どもの頭人は、頭頂部に山鳥の尾羽を立て赤と緑の造花で飾られた丸笠を被り、白地に金の織紋様が入った狩衣、紫の袴という姿で祭礼に参加する。顔は白粉塗りと口紅で化粧が施され、額に墨で左右に点ふたつ（…）を描く。足下は白足袋に草履であるが、移動の際は大人が抱えるなど地面に足を着けない。

宵宮の夕方、猿田彦と礼装姿の各村の総代たちが頭人の自宅へ迎えに行き、一緒に神社へ向かう。午後六時からの頭人奉告祭に参列し、その後に、社務所の座敷で関係者による食事がおこなわれる。その際、最初に頭人が座敷の上座に着席するまで他の人々は着席しないことになっている。

祭礼当日（昼宮）、頭人は午前六時すぎに各村の総代たちと自宅を出発して、神社へ向かう。

神社では拝殿で献饌などの神事が神職によっておこなわれるが、頭人は神事に参列するだけである。

神事がおこなわれた後、神社から約二キロメートル西南にある大國の下（宮（御旅所）へ神輿の渡御をする。この時、神職と頭人は、神輿の直前を馬に乗って進む。

大國の下（宮）で昼食休憩後、御旅所祭がおこなわれ、還幸する。往きと同じ行列順で神社へと帰る。

神社に到着するとすぐに撤饌の儀礼が始まる。境内に拝殿を正面にして設けられた座席に頭人が座し、拝殿の祭壇と頭人の間に総代たちが並ぶ。総代たちは祭壇の供物を順に手にとって渡していき、頭人へと運ぶ。頭人は一つずつこれを受け取り、受け取った後は側に控え

る役の人に渡す。最後にその人がまとめて社務所へと運ぶ。

撤饌が終わると、神輿を拝殿横の倉へ納める。頭人も両親と一緒に乗用車で帰宅するが、この際は地に足を着けてもよいとされる。

②西条八幡神社（加古川市八幡町）

西条八幡神社の祭礼は、毎年十月の第二土曜日におこなわれる。秋祭りに参加する氏子地区は、上西条と中西条である。一つ物はこの二地区から一年交代で出され、中西条では「ヒトツモノ」、上西条では「馬乗り」と呼ばれている。小学校一、二年生の両親がそろっている男児が務め、狩衣に金冠を着用し、背中に扇と「八幡大神」と墨書された幟をさす。

馬乗りになると、毎日一番風呂に入り、下着と寝間着は新しいものに着替える。寝る時は床の間に真蓑を編み、その上に布団を敷いて東向きで寝ることになっている。また、祭礼の前の十日間は、毎朝、上・中西条八幡神社の約二キロメートル東にある宗佐厄神八幡神社（加古川市宗佐）の御神水へ浄めに行く。地面に足を付けてはならないとされ、履物を履かず、成人男性に抱きかかえられるか、馬に乗って移動する。

本宮（十月第二土曜日）の神事の際は拝殿と本殿をつなぐ階段に着座し、神事が終わるまで動いてはならないとされている。神事が終わると、神輿が本殿から出て境内を回る。その後、馬乗りの儀式と称して境内を馬に乗って三周する。一周して本殿の正面に来るたびに馬を止めて背中にさしている扇を手に取り拝礼する。三回目の拝礼が終了した後、馬乗りは境内を退出し、鳥居をくぐった後、本殿の方を振り

返って一礼し、帰宅する。¹³⁾

③崎宮神社（加古川市尾上町）

崎宮神社の祭礼は、十月の第二日曜日におこなわれる。

崎宮神社の一つ物は「カゲシ」と呼ばれ、昭和三十年代までは、養田・大崎と池田の二地区から一年交代で出されていたが、現在は養田・大崎からは出されていない。平成十七年（二〇〇五）に池田からカゲシを出したとの報告が確認できるが、現在の状況は未確認である。この二地区からは、カゲシとは別に四十九、五十歳の成人男性が務める頭人が出される。頭人については現在も出ている。

最近のカゲシについては未確認であり、装束などは未詳であるが、養田地区に保存されている「崎宮神社縁起神幸式資料」（昭和五十二年「一九七七」）にかつておこなわれていた儀礼のようすが詳細に記されているのでそれを参考にしたい。

祭礼は、以前は十月十、十一日におこなわれていた。

カゲシは、五、六歳の男児が務め、山鳥の尾がついた冠、直衣を着用し、額に墨で左右に点ふたつ（…）を描く。祭礼に先立って九月中旬には頭人宅の屋根に木箱に砂を入れ御幣を立てたオハケが設置され、庭にはオダンと呼ばれる仮設の祭壇が設置される。祭礼の一週間前から精進入りとして、カゲシは頭人宅に宿泊し、別火の生活に入った。

十月十日の宵宮では、カゲシは頭人とともに神社へ参拝し、餅米、小餅、柿、栗などを供える。明治中期以前は、カゲシはこの夜、御旅所に宿泊したとのことである。

十月十一日の本宮では、カゲシは御旅所への渡御に馬に乗って参加した。順番は列の最後尾となっている。御旅所では頭式と称する盃事と奉幣をおこない、神社へ戻ってからも拝殿で頭式がおこなわれた。頭式が終わると、カゲシだけが先に拝殿を下って、乗馬で鳥居のところまで行き、氏子の「ヤットコセー」の囃子で引き返し、頭人を迎えて共に退場したと記されている。

④高砂神社（高砂市高砂町）

高砂神社がある高砂町は、江戸時代初頭に、姫路藩主・本田忠政によつて、加古川河口部を新しく整備してできた町である。その時に、加古川対岸の養田村・大崎村・池田村から移住した人々が氏子となった。このため、高砂神社の祭礼は、養田村にある崎宮神社と合わせておこなわれていた。また高砂町の西に隣接する荒井村もこの祭礼に参加していた。

かつての祭礼は、宵宮の真夜中、崎宮神社で神輿に神霊を遷した後、対岸の高砂神社に船で渡り、翌日の本宮での神事をおこなった。その際、崎宮神社のカゲシも神輿と一緒に高砂神社へと渡った。

ところが、江戸時代中期の宝暦三年（一七五三）以降、理由は不明であるが、池田村・養田村・大崎村の氏子が高砂神社の氏子から離脱し、崎宮神社と高砂神社の祭礼は別々におこなわれるようになった。この時に、荒井村からの参加もなくなり、村内の荒井神社で祭礼をおこなうようになった。したがって現在の高砂神社と荒井神社の祭礼は、崎宮神社の祭礼から枝分かれし、十八世紀に確立した形態であることがわかる。

現在の高砂神社の祭礼は、毎年十月十、十一日の二日間にわたっておこなわれる。氏子は、高砂町全域である。祭礼の運営は、神社関係者（神職・奉賛会）と秋祭り保存会が中心となっておこなう。神役である御先司（車楽^{だんじり}）、御獅子司（車楽）、神輿、頭家、一つ物、押太鼓を奉仕する。これ以外に、氏子各町には氏子総代があり、各町内に役員が決められ、車楽や曳き物、子供神輿を運営する。

高砂神社の「頭家・一つ物行事」は、昭和三十六年以降は途絶えていたが、平成十六年に秋祭り保存会によって復活された。頭家は小学五年生男児二名、一つ物は小学一・二年生の男児一名が勤める。この他に一つ物が乗る馬の轡持ち（小学五年生女児二名）がいる。現在は広く氏子町から募集しているが、かつては氏子町で頭家、一つ物を輪番で出していた。

頭家、一つ物の衣装は、保存会で管理されているものを使用する。一つ物は、高砂神社の神紋である木瓜紋が付いた色狩衣を着て指貫を履き、頭には山鳥の尾と造花を飾った金冠を被る。顔に化粧を施し、墨で額に「…」を書く。頭家は白の直垂^{ひたれ}に侍烏帽子姿である。

祭礼に先立って、十月一日、頭家宅では柴壇の神事がおこなわれる。オシバダンと呼ばれる一・五メートル四方の木枠に薦を垂らした祭壇が作られる。その天面には御幣と水、酒、塩などの供物が置かれる。柴壇の神事当日は、神社で竹を伐り、オシバダンの四隅に立て、注連縄を巡らせる。準備が整うと神職が赴いてお祓いをする。頭家は、この日から祭りまで、毎朝これを拝礼する。一つ物はこの神事には参加しない。

同日、午後から、一つ物、頭家、轡持ち、奉幣人、御幣持ちは高砂

神社へ社参し、本殿でお祓いを受ける。その後、十九時から自治会館で「宿開き」があり、宿の正面に一つ物の冠と、頭家の烏帽子を飾る。

祭礼の前日の十月九日の夕方から「衣装そろえ」が行われる。神輿渡御に参加する全員が、当日と同じ衣装を着け、宿を出発し、一時間半ほどかけて高砂町内の約半分の範囲を巡る。

十月十日は宵宮である。かつては十日に神幸祭と御旅所式、翌十一日に奉幣式と頭家式が行われていたが、現在は十日に集約しておこなわれている。

本宮の午前、本殿で神幸祭がおこなわれ、神輿へ神霊を遷した後、神社から約一キロメートル北にある御旅所への神輿渡御がおこなわれる。一つ物は馬に乗って神輿の後を進む。昼前に御旅所に到着し、御旅所祭がおこなわれる。御旅所となる商業施設の駐車場の中央に、約五メートル四方にわたって注連縄を張り巡らせ、神事とする。北側に神輿を安置し、その前に祭壇を組み、供物と御獅子司によって奉仕される獅子頭を並べる。

一同は神輿に向かって整列して、神職による修祓を受ける。この時、一つ物は馬に乗ったまま修祓を受ける。

修祓が終わると、その場にゴザが敷かれ、神輿を背に北面に神職と秋祭り保存会の責任者が座り、それに対面する形で一つ物と付き添いの父親が座る。東と西側には、神輿に近い順に、頭家、氏子総代二名が座る。

一同が座に着くと、一つ物、神職、秋祭り保存会の責任者、氏子総代の順に頭家二名から酌を受け、盃をいただく。その後、往路と同様

の行列で神社へ戻る。神社へ到着後、還幸祭がおこなわれ、一つ物の役割は終了する。

⑤荒井神社（高砂市荒井町）

荒井神社の祭礼は、現在は体育の日の前々日、前日となっている。秋祭りに参加する氏子地区は、小松原地区を除く荒井町で、これが東西南北の四組に分かれており、一つ物はこの四組から輪番で出される。一つ物は「稚児頭」とも呼ばれ、幼稚園に通う男児（五、六歳）が務め、狩衣に金冠を着用し、足に白足袋を履く。衣装については神社にあるものを借りるか、各自で用意することになっており、厳密な決まりはない。

九月初めに一つ物を務める稚児が決定し、九月末に稚児宅に「一つ物」と墨書された提灯が飾られる。十月一日から精進入りとされるが、現在は特に潔斎などはおこなわれない。

本宮の日の朝、一つ物は馬に乗って神社へ向かう。午前中、神社で発輿祭がおこなわれ、それが終わると御旅所への神輿渡御となる。この際、一つ物は行列の最後を進む。

昼前には御旅所へ到着し、御旅所祭がおこなわれる。その後、二時間程度の昼休憩をはさんで神社へ戻る。神社へ到着すると還幸祭がおこなわれるが、一つ物は御幣を持って列座する。この御幣は、一つ物から祢宜へ手渡し、祢宜が神前へ納める。¹⁴⁾

⑥曾根天満宮（高砂市曾根町）

曾根天満宮では、毎年十月十三日を宵宮、十四日を昼宮として秋祭

りがおこなわれる。

曾根天満宮の一つ物は、四、七歳の男児が務める。毎年、氏子七地区のうち、阿弥陀東村、阿弥陀西村、本庄村、伊村の四地区から各一人、計四人出すことが決まっている。

一つ物は、天満宮の神紋である梅鉢紋が付いた色狩衣に指貫を履き、頭に山鳥の尾と造花の菊を飾った笠を被る。顔に白粉を塗り、墨で額に八の字を書く。

宵宮の夕方、身支度した一つ物は、村の青年三人による肩車で自宅を出発し、祭礼における村の責任者である清書元宅へ寄ってから、曾根天満宮へ向かう。一つ物は祭礼を通じて地面に足をつけてはならないとされ、移動は肩車か馬でおこなう。なお、阿弥陀東村、西村、本庄村では一つ物が道行く際に、「ヨイヨイバー」という歌い出しの唄を歌いながら進む。そのため、一つ物をヨイヨイバーとも呼んでいる。

天満宮へ到着すると、年少の一つ物から順に正門から境内へ入る。その際、肩車役は一つ物を肩に乗せたまま正門で一旦静止した後、一気に社殿に向かって突進し、一つ物を放り投げるようにして拝殿へ上げる。四村の一つ物と行事頭人、それぞれの両親と、神職が座に着くと盃事がおこなわれ、盃事が終わると拝殿から年少者から退出する。

翌日の昼宮で、一つ物は馬に乗って移動する。その馬は、早朝五時ごろ、身体を洗う汐かきを行う。七時ごろから一つ物は身支度をはじめ、衣装が整うと清書元宅へ寄り、午前中は村内を巡る。そして十二時過ぎに到着できるように、天満宮へ向かう。

馬に乗った一つ物を先頭に、太刀、傘、巴の描かれた紙をつけた尾花（ススキ）、休憩時に使うゴザや座布団を持った親族が続く。

午後から、拝殿で神饌を捧げる和供神事がおこなわれ、それが終わると「馬駈け」がおこなわれる。神職、一つ物、行事頭人は拝殿を出て馬に乗り、境内を一巡して再び拝殿へ上がる。続いて一つ物の馬だけ鞍をはずし、同じコースを三周走らせる。続いて、正門と本殿の間点から本殿の屋根へ向けて射手が弓を放つ流鏑馬がおこなわれる。拝殿では宵宮と同様に盃事がおこなわれる。盃事が終わると、一つ物は乗馬し、村へ帰る。¹⁵⁾

⑦大塩天満宮（姫路市大塩町）

大塩天満宮では、毎年十月十四日を宵宮、十五日を本宮として秋祭りがおこなわれる。

大塩天満宮の一つ物は、氏子町八地区（東之丁、宮本丁、中之丁、西之丁、北脇丁、西濱丁、牛谷丁、小林丁）から各一名ずつ、計八名出される。五、六歳の男児が務める。衣装は八地区とも同じで、水色の狩衣に金の稚児烏帽子を着用し、額に八の字の化粧を施され、成人男性の肩車によって移動する。

十月十五日（本宮）の午前十時から一つ物神事がおこなわれる。一つ物神事では、八人の一つ物が母親とともに拝殿に座し、奉幣の後、神職とともに盃事をおこなう。神事が終わると、記念撮影をし、お菓子をおいて退出する。

大塩天満宮の祭礼では、かつては大塩田の地主であった地元の有力者が東西二組に所属し、各組が交代で一つ物を奉仕するとともに、祭礼経費の大半を負担していた。

また、一つ物は神霊と称され、精進潔斎をし、祭礼当日は神殿で神

主と盃を交わしたとの記録もあり、かつては神事に関わる重要な存在であった。

しかし、製塩業の衰退による有力者の没落で、一つ物は大塩町四町から各一名ずつの奉仕へ変わり、そして、昭和四十年代以降は、氏子町八地区から各一名ずつ、計八名の奉仕となった。¹⁶⁾

以上、加古川市、高砂市、姫路市の一つ物の概要を見てきた。

その特徴としては、潔斎の厳格さに差異はあるものの、いずれの事例も、清浄であることが意識されており、神と同格に扱われていることがあげられ、五、六歳の男児が務めている。他地域の一つ物と共通の特徴を持ちながら、神吉八幡神社、西条八幡神社、崎宮神社、荒井神社に見られるように、必ずしも「一つ物」という呼称を持たない、または一つ物とは別の呼称を持っていることが特徴としてあげられる。

一つ物の人数についても特徴があり、神吉八幡神社、西条八幡神社、崎宮神社、荒井神社のように、祭礼の当番に当たっている地区から輪番で一人が出される場合と、曾根天満宮と大塩天満宮のように祭礼への参加各地区のうち決まった地区から各一人出される場合がある。

各祭礼の構造から一つ物の役割を見ると、神吉八幡神社、西条八幡神社、崎宮神社、高砂神社、荒井神社では、神社での神事以外に、神輿の渡御と御旅所祭があり、一つ物はどちらにも参加している。その際に、一つ物とは別に祭礼の頭人も存在しており、一つ物と頭人がセットで神事がとりおこなわれていることがあげられる。

一方で曾根天満宮と大塩天満宮では、神輿渡御はなく、神事を中心

が一つ物による盃事となっている。ただし、この二社では神輿渡御はおこなわれないが、一つ物とともに流鏑馬（曾根天満宮）、獅子舞（大塩天満宮）が出ている。これらは一つ物と同様に中世以来の祭祀の要素であり、現行の祭祀でこれらと一つ物がいっしょに登場していることも特徴と言える。

次に紹介する波賀八幡神社（兵庫県宍粟市波賀町）の一つ物は、正月の籤引き^{くじ}によって祭りへの登場の有無が決まるため、毎年登場するとは限らず、また近年は登場しない年が続いたこともあり、その存在をほとんど知られていなかった。次章ではこの事例について紹介するとともに、播磨地方南部の一つ物との違いなど、その特徴を見ていきたい。

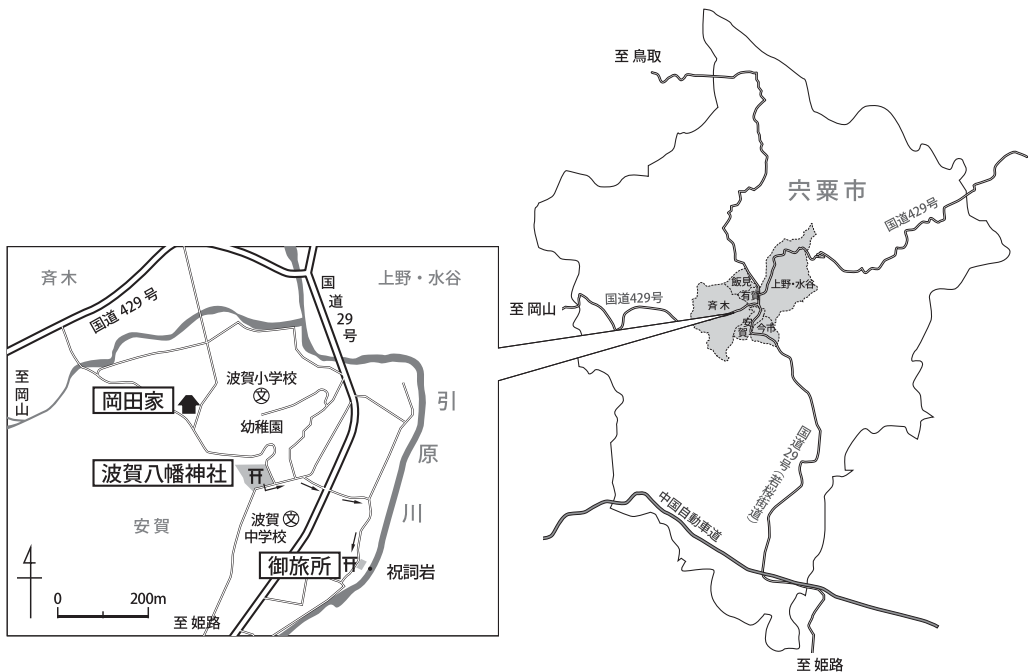
四、波賀八幡神社の一つ物

波賀八幡神社は、兵庫県宍粟市波賀町安賀にあり、宍粟市と鳥取市を結ぶ国道二十九号線（通称・若桜街道）から西に入った集落中心部に位置している（地図2）。祭神は応神天皇、仲哀天皇、神功皇后の三神である。

『波賀町史』¹⁷によれば、現在も同町斉木地区にあり、江戸期に庄屋を務めていた岡田家には、江戸時代初期の承応年間（一六五二～一六五五年）の記録が伝わっており、それによると神社の創立は応和元年（九六一）と伝えられ、昭和三十六年（一九六一）には千年祭をおこなったとされている。

かつては九月十五日が祭日で、当日午前一時に新穀二升三合を炊

地図2 波賀八幡神社周辺図



き、大きな椀に盛ってお供えする朝の御膳があった。また濁り酒を醸造して供えていたが、昭和二十六年（一九五一）に禁止された。

現在、秋祭りは毎年十月二十一日に近い日曜日におこなわれ、安賀・今市、上野・水谷、飯見、有賀、斉木の五地区が輪番で祭礼を取り仕切っている。

この祭礼では、御幸祭と呼ばれる御旅所への神輿の渡御がおこなわれる。ただし御幸祭の挙行については、祭りに参加する五地区の総代と自治会長、岡田家の当主が同席する場で神職が籤を引き、岡田家の当主によって不正がないか籤を改め、実施の有無を決定する。かつては祭日の十五日前に籤引きがおこなわれたが、現在は毎年元旦の歳旦祭の後におこなわれる。

その御幸祭に、一つ物が登場する。

御幸祭では、神輿に付き従う役を七十五役と呼び、役を務める家が決まっている。御幸祭を取り仕切る責任者は前述の岡田家の当主であり、一つ物は岡田家の血縁か、推薦する者と決まっている。岡田家にこの役が当たっている理由は未詳であるが、岡田家に伝わる記録に一つ物の記載が見え、岡田家かなり古くからこの役を務めてきたことが伺える。¹⁸⁾

一つ物の年齢条件については未詳であるが、調査をおこなった平成二十八年（二〇一六）は、九歳の男児が務めていた。¹⁹⁾金紙で縁取られた紙の板を頭に載せ、紅白の紐で顎下に固定し、額には赤地に岡田家の紋である丸に三（引両紋）が付いた鉢巻をする。衣装は白金地に織紋様が入った着物と袴を着用し、その上から金地の袖のない羽織を着る。羽織の後ろの襟元に山鳥の尾羽二本と、ススキの穂を一本挿す。

顔は白粉塗りと口紅で化粧が施され、額に墨で左右に点ふたつ（∴）を描く。足下は白足袋に草履であるが、移動の際は大人が抱えるか、馬に乗って、地面に足を付けない。

調査年の平成二十八年（二〇一六）は、十月二十三日が祭日で、四年ぶりに御幸祭がおこなわれた。なお、当番地区は有賀地区であった。以下、時系列に沿って祭礼の流れを見ていく。

祭礼当日の午前十時、五地区の各総代が出席して祓所で神事がおこなわれる。祓所は、正門から境内へ入り、正面の社殿に向かって右手奥にある。四方の壁がない舞台のような建物で、二、三十人が座すことができる。

続いて、当番地区の担ぎ手が神輿を幣殿へ担ぎ入れて安置する。社殿は、正門から続く石畳を進み、その突き当りにある石段を二十段ほど上がった高所にある。社殿は手前から奥に拝殿、幣殿、本殿と間続きになっている。拝殿は二十人も入るといっぺいになる広さである。

午後十二時三十分、祓所で神職と代表総代による大座の式と呼ばれる盃事があり、担ぎ手たちも同席する。それが終わると一同は、御幸祭に際しておこなわれる出御祭へ参列するために拝殿へと移動する。

午後一時頃、岡田家で支度を整え、神事がおこなわれた後、縁側から馬に乗って出発した一つ物が、馬に乗って神社に到着する。一つ物は鳥居の前で馬から降り、成人男性の馬丁に抱きかかえられて正門をくぐり、石段を上がって拝殿へ上がる。拝殿には御幸祭に参加する人々のうち、総代、決まった家から選出された女兒が務める神子六名がすでに着座し、神輿の担ぎ手たちは拝殿の外に控える。一つ物が着座し、出御祭が始められる。参加者一同は修祓を受け、神職が神輿に

神霊を遷す。

午後一時四十分、一同は行列を整え、神社の東南にある、引原川の川岸の櫃原という場所にある御旅所へ出発する。約五〇〇メートルの道のりである。以下、行列順は次のとおりである（祭礼当日現地で揭示されていた資料を元に記述）。

神職―箒―国旗―一つ物・幟二名・馬丁四名・槍二名・大傘一名・雑仕一名・草履取り一名・幟―錦旗―警衛（鼻高）―大榊―幟―鉾―太刀―唐櫃大・小―奉幣―鉾―弓矢―真榊―陣ザサラ―少女神子二名―神職（祭主）―神輿―神職―少女神子二名―鞍掛―女神子二名―太鼓―役員―幟（大・小）―太刀―鉾・太刀―鉾・太刀―鉾―獅子頭―子ども神輿

続いて、行列の構成で特徴的なものを詳しく見ていく。

先頭の神職、箒、国旗（日の丸）に続き、一つ物は成人男性が務める幟二名、槍二名、大傘一名、雑仕一名、草履取り一名、馬丁四名と共に馬に乗って進む（写真5）。

警衛（鼻高）は男性二名で、白丁姿に鼻高の面をつけ、手に約二メートルの長さの木の杖を持ち、足下は運動靴である（写真7）。これは王の舞であった可能性がある。王の舞とは、中世以来の祭礼芸能で、舞手は顔に鼻高面、頭には鳥兜や鳳凰の冠などを被り、鉾を持って、身を反らしたり膝を曲げたりしながら舞う。

陣ザサラは、田楽踊りで使用される「びんざさら」のことで、長さ十センチメートルほどの竹または木片を紐で一列に繋いだものである。これを白丁姿に烏帽子を被った男性二名が首からさげ、神輿の直前を進む（写真8）。

少女神子と女神子は、一つ物と同じように神子を出す家が決まっております。六歳から十歳ぐらいの少女が務める。神子は赤やピンクの上着に紫の袴を着用し、頭に金冠を頂く姿で、白足袋に草履履きであるが、親族の男性に背負われて移動し、地面に足を付けない（写真9）。獅子頭は礼服姿の男性が一名、獅子舞の頭部だけを手に持って進む（写真10）。陣ザサラや獅子頭は、芸能の要素であるが、渡御列に参加するだけで、芸能の奉納はおこなわれない。

午後二時、一行は御旅所に到着する。かつての御旅所での神事は、御輿台という土台を石垣で囲んだ所でおこなわれていたが、平成十一年（一九九九）の河川改修の際にそれが取り除かれ、神社の所有地も減少したため、それ以降は神事をおこなう場所の確保ができなくなっていた。その後、平成十五年（二〇〇三）に地元企業が新たに土地を購入して神社へ奉納し、再び御旅所祭をおこなうことができるようになったとのことである²⁰。

御旅所に神輿が据えられると、一つ物は馬丁に抱きかかえられて馬から降り、薦こもの上に設置された床几に、神輿に対面するように座る。一方で神職は、御旅所のすぐ側を流れる引原川の川中にある祝詞岩と呼ばれる平らな岩へと降りて行き、岩の上に立って対岸に向かって一回弓を引く。続いて、祝詞を奏上した後、神輿の方へと戻る。

神輿への献饌、祝詞奏上があり、神子参拝と称して、神子が神輿の周りを鈴を鳴らしながら三周する。続いて氏子総代や自治会長による玉串奉奠がおこなわれ、その後、直会として一同に神酒と小餅が振舞われる。

三十分程度で御旅所祭が終わり、ただちに還幸となる。一つ物は再

び馬丁に抱えられて馬に乗り、往路と同じ道を戻る。神社へ到着後、拝殿で還御祭がおこなわれ、それが終わると一つ物は歩いて神社を退出する。

還幸祭の後も境内には多くの人が残っており、子ども相撲や餅まきがおこなわれる。

五、結 び

波賀八幡神社の一つ物の特徴としては、神と同格に扱われること、山鳥の尾の羽根がついた笠を着用し、地に足を着けてはならないとされ馬で移動することなど、播磨地方南部の一つ物とほとんど同じと言える。しかし、一つ物だけを見ては気がつかない特徴がある。それは、一つ物が、鼻高(王の舞か)、ササラ(田楽)、獅子頭(獅子舞)がいつしよに出ていること、すなわち、祭礼の構成に特徴があると言える。

波賀八幡神社の祭礼は、現状の記録としては、岡田家に伝わるとされる承応年間(一六五二―一六五五年)の史料しかなく、それ以上さかのぼることはできない。しかしながら、御幸祭の行列には鼻高(王の舞か)、ササラ(田楽)、獅子頭(獅子舞)が出ており、中世の祭礼芸能の形態を留めていると言われている上鴨川住吉神社(兵庫県加東市上鴨川)の祭礼芸能の構成とよく似ている。

また、現在は廃絶しているが、天正年間(一五七三―一五九三年)の記録で、大宮天神社(現 天満神社・神崎郡市川町)²¹や船津正八幡神社(姫路市船津町)²²の祭礼に、一つ物が獅子舞や田楽、王の舞(龍

音舞)とともに出ていたことが記されている。

これらのことから、波賀八幡神社の祭礼は、江戸時代よりも前の時代からおこなわれ、中世の祭礼の形態を今に伝えている可能性が高いと考えられる。

このように一つ物単体ではなく、一つ物が出る祭礼の構成にも目を向けていくと、播磨国総社(射楯兵主神社・姫路市総社本町)の一つ山大祭(六十年毎)、三つ山大祭(二十年毎)の五種神事もまた中世以来の形態を伝えているとされており、五種神事で、競馬、流鏑馬、神子渡、一つ物(現在は成人女性)、弓鉾指が登場しているが、これは一つ物と流鏑馬が一緒に出るという点では曾根天満宮と似ていると言える。一方、神吉八幡神社や、崎宮神社には中世の祭礼の要素は全く見られないので、いつに起源を持つ祭礼かを特定することは難しい。また、高砂神社、荒井神社については江戸時代中期の宝暦三年に崎宮神社の祭礼から枝分かれし、再構成された形態であることが明らかになっているため、近世の形態を伝えていると言える。

以上のように、本稿では播磨地方の一つ物について俯瞰してきた。その結果、播磨地方の一つ物は、波賀八幡神社や大宮天神社などの事例から、その存在を中世末期にまでさかのぼることができると言える。しかし、播磨地方の一つ物は、個別の事例ごとに見えていくと、さまざまな時代の要素が混在しており、それは、各事例を継承する地域社会の要求によるものが大きいと言える。したがって、今後、播磨地方の一つ物について発生過程や伝播経路などを総論的に明らかにしようとする場合には、各事例の歴史的背景や地域特性を個別に検討していく作業が必要であろう。この点については今後の課題としたい。



1. 波賀八幡神社
(宍粟市波賀町安賀)



2. 大座の式



3. 拝殿へ上がる一つ物



4. 出御式



5. 馬に乗る一つ物



6. 御幸祭 出発



7. 警衛 (鼻高)



8. 陣ザサラ



9. 少女神子



10. 獅子頭



11. 御旅所



12. 祝詞岩に立ち弓を引く神職



13. 御旅所祭

註

- (1) 兵庫県南東部から中西部。東は明石市、西は赤穂市、北は宍粟市から西脇市あたりまでとする。
- (2) 福原敏男、「祭礼を飾るもの―一つ物の成立と伝播―」、「祭礼文化史の研究」(法政大学出版局、一九九五年)(初出、「国立歴史民俗博物館研究報告」第四五集、一九九二年)
- (3) 松本愛重、「百番の一つ物に就て」、「歴史地理」第十一巻第一号、一九〇八年
- (4) 柳田国男、「祭から祭禮へ」、「日本の祭」(弘文堂、一九四二年)、「祭と司祭者」、「氏神と氏子」(小山書店、一九四七年)
- (5) 中山太郎、「一つ物」、「土俗と伝説」一卷三号、一九一八年
- (6) 堀一郎、「第二章神に扮する人」、「我が國民間信仰史の研究」(二)宗教編、一九五三年
- (7) 萩原龍夫、「祭り方」『日本民俗学大系』八巻、一九五九年
- (8) 東條寛、「粉河六月会と速玉大社御船祭―童児頭人の歴史民俗学的研究―」、「紀伊半島の文化史的研究」民俗編(横田健一・上井久義編著、関西大学出版部、一九八八年)
- (9) 永島福太郎、「播州の神事稚児「二ツ物」」『兵庫県の歴史』第二十三号、一九八七年
- (10) 橋本裕之、「若狭の一つ物―王の舞との関連に触れて―」、「国立歴史民俗博物館研究報告」第二十六集、一九九〇年
- (11) 福原著、前掲註(2)参照。
- (12) 二〇〇五年度、兵庫県教育委員会が県下で「ヒトツモノ」などと呼ばれ、子どもが頭人を勤める事例について調査を行い、二〇〇七年に『稚児の祭礼 ヒトツモノをめぐって』と題した調査報告書が刊行された。この調査によって、初めて兵庫県下の一つ物が登場する祭礼を俯瞰できるようになった。
- (13) 大江篤、「8 上・中西条八幡神社馬乗り(一ツ物)」、「『稚児の祭礼ヒトツモノをめぐって』」
- (14) 埴岡真弓、「5 荒井神社一ツ物・頭家・頭人行事」、「『稚児の祭礼

ヒトツモノをめぐって』

- (15) 曾根文省、「東播磨の一ツ物」、「近畿民俗」六四号、一九七五年
小栗栖健治、「7 曾根天満宮一ツ物神事」、「『稚児の祭礼 ヒトツモノをめぐって』」
- (16) 地主喬、「1 大塩天満宮の一つ物行事」、「『稚児の祭礼 ヒトツモノをめぐって』」
- (17) 『波賀町誌』、一九八六年、四七六―四八一ページ
現地配布資料「波賀八幡神社 御幸祭」(波賀八幡神社御幸保存会、二〇一〇年、二〇一六年現地調査。
- (19) 二〇一六年の一ツ物は九歳の男児だった、その前々回の二〇一〇年には六、七歳の男児が務めていた。
前掲資料、註(18)参照。
- (20) 「大宮天神社神事次第」天正七年(一五七九)〔『稚児の祭礼』収録、資料編三ページ〕
播磨国神崎東郡川述郷大宮天神社神事相極次第
一 神領田地耆町八反式拾五代 上古ヨリ相伝地
一 管弦僧参入
一 社務式入 栗生田左京進
一 一壺ツ者 高橋四郎太夫
一 神子ノ渡 内藤右衛門尉泰盛俊
一 練テノ相撲 耆ツ者ノ次二有、
西川述村 立会
屋形村
- 一 獅子舞式頭 浅野
一 田楽踊 東小畑村
一 龍音舞 西小畑村
一流鏑馬
一 神輿 西小畑村
昇酌取
但、惣而小道具出ル、依之繩ヨリ内割賦除之也、(以下省略) ※傍

線は筆者による

(22)

「播磨八幡三所宮神事次第相極候享」天正一九年（一五九二）（「稚児の祭礼」収録、資料編三ページ）

一 出家参人 中村太郎右衛門尉平吉近

息小三郎正則

一 壺ツ物 大塚左衛門尉源俊基

一 神子渡 壺ツ物の次ニ有リ

一 練テノ相撲 溝口村 立会

御立村

一 獅子頭二頭 下垣内村 立会

土師村

一 猿楽舞 宮脇村

一 龍音舞

一流鐺馬

一 神輿舁酌取 上野村 立会

御立村

但、惣テ小道具出ル依之繩ヨリ内割賦除之也、（以下省略）※傍線は筆者による

(23)

久下降史、「第四章第二節五種の神事」、「『播磨国総社三ツ山大祭調査報告書』、姫路市教育委員会編、二〇一五年

（関西大学大学院文学研究科・博士課程後期課程単位取得退学・

大阪大学COデザインセンター）（特任研究員）